

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

## 石見神楽の演目「鐘馗」の形成と内容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 鍾馗, 民俗芸能, 石見神楽, 島根県 キーワード (En): 作成者: 安西, 生世 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001644">https://doi.org/10.57529/0002001644</a>

## 石見神楽の演目「鐘馗」の形成と内容

About forming and details "Sho-ki", the program of Iwami Kagura in Shimane prefecture

安西生世

【キーワード】 鍾馗 民俗芸能 石見神楽 島根県

### 要旨

中国唐代の伝説上の人物である鍾馗は、日中両国で防疫厄除等の神として民間に信仰されてきた。日本では、中世以降、絵画や護符、つくりものなど、広く受容してきた事例をみることができる。本稿では、島根県西部の民俗芸能、石見神楽の演目のうち、鍾馗が主役となる演目「鐘馗」をとりあげ、石見地域の浜田以東で確認できる近世期の役指帳や近代以降の台本から、演目のその形成と内容について考察した。これまで、この演目「鐘馗」について、一般的に『備後国風土記』逸文にある蘇民将来伝説と、謡曲「鍾馗」が合わさって形成されたものと解釈されてきた。近世期の役指帳からは、当地域において演目「鐘馗」は、一八世紀の中頃には既に神楽の演目として確立していたことがわかった。近代以降の台本を(一)登場人物とその正体、(二)神の採り物と表象、(三)神楽歌、(四)胴取り(大太鼓)との掛け合いについて注目して比較すると、四つの地域によって若干異なる内容が伝承されていることが明らかになった。本演目は、「シヨウキ」という神が、一切の病を司る鬼を退治することが主題の舞であり、謡曲との関連性は限定的であるといわざるを得ない。今後、石見地域内外の類似演目を比較することで、当地における民間信仰や神楽の成立について検討する一つの手掛かりになるだろう。

## 序

中国唐代の伝説上の人物である鍾馗への信仰は、玄宗皇帝が瘡にかかった際に、鍾馗と名乗る大鬼が、小鬼を捕らえて喰らった夢から覚めると、病は癒えていたことから、その大鬼の姿を画家の呉道子（呉道玄）に描かせたことにはじまる。呉道子が描いた鍾馗図像は、玄宗皇帝の時代以降、年末に暦とともに臣下へ下賜され、門神として信仰されたり、悪疫除けとして信仰されたりしており、さらには吉祥招福のイメージとして描かれるようになった。日本においても、中世以降、悪疫除けの神として民間に信仰されてきた。

日中の比較からみた鍾馗信仰の変遷については、劉穎が詳しく検討しているほか、絵画史や美術・工芸史、年中行事や信仰としての民俗史や、日本における中世神話を中心とした宗教史などでとりあげられており、日中両国において比較的なじみ深いテーマだといえる。

二〇二〇年以降、世界的に甚大な影響を及ぼした新型コロナウイルス感染拡大によって、国内では鍾馗を含めた神仏、妖怪、呪符・護符など、「禍い」や「祈り」に関する事象への注目が高まった。二〇二二年の松尾恒一「餓鬼・孤魂―祀り手のない死霊―と疫病」や、二〇二三年の伊藤慎吾による口頭発表「日本における鍾馗像の展開」<sup>(3)</sup>では、鍾馗の絵画資料等の事例に加えて、民俗芸能の事例として鳥根県西部に伝承される、石見神楽の演目「鐘馗」<sup>(4)</sup>をとりあげた。

この演目は、中国の鬼神である鍾馗と、スサノオノミコトとが習合した「神」<sup>(5)</sup>が、疫神<sup>(6)</sup>という「鬼」を退治する一鬼の舞で、神社祭礼にもなっている奉納神楽で舞われる演目のなかでも、重要度が高い演目である。そこで、本稿では、石見神楽の演目「鐘馗」の形成の道筋について、謡曲との比較や、残された台本から考察し、今後の石見神楽の演目および台本研究への足がかりとしたい。

## 一 石見神楽について

石見神楽は、島根県西部および広島県北部に伝承される民俗芸能である。一般的に石見神楽のイメージとして、蛇胴を操り口から火花を噴く大蛇や、豪華絢爛な衣裳、軽快なリズムなどが挙げられる。石見神楽について、山路興造<sup>5)</sup>が、

現在一般に、「石見神楽」といえば、どのようなイメージで語られるかといえば、多くの人は(略)八岐の大蛇が数匹、舞台狭しと暴れ回り、最後に素戔鳴尊に退治される「八岐大蛇」を思い浮かべる。

と述べるように(山路 二〇一四 五一)、石見神楽の代名詞として演目「大蛇」を挙げることに否を唱える者はいない。一方で、対外的に舞う機会こそ少ないものの、地元で「大蛇」に比肩する人気を誇り続けてきた演目がある。それが「鐘馗」【画像1】である。

近世期の石見地域の社会と神楽については、拙稿「石見神楽の演目「大蛇」の誕生―オロチが物語る石見神楽の文化と技術―」および「石見神楽社中による祭典奏楽と神楽奏楽の関係性」<sup>6)</sup>で概述しているが、石見銀山料・浜田藩・津和野藩がそれぞれ領地支配しており、浜田・津和野両藩では、割元庄屋が統括する「組」が人びとの生活基盤の単位だった。その「組」のうち、さらに近郷数ヶ村ごとに神職



鐘馗と鬼

【画像1】石見神楽「鐘馗」(1940年代撮影、熱田神社蔵)

等が集まって、祭礼や神楽奉納を執行していたことが近世史料からわかっている。近代以降、これらの組は解散し、各神社の神職がそれぞれの氏子・有志に神楽舞を指導したことで、現在の石見神楽の礎が築かれた。

当地域の神楽は、全国的に知名度の高い「花祭」や「いざなぎ流の神楽」等と比べて、神楽舞そのものに呪術的な所作や祭文といった要素があまり見られない。大太鼓・小太鼓・手拍子（銅抜き型の鉦）と笛による奏楽と神楽歌に合わせて、拝殿や舞殿等に竹で組まれた天蓋の下おおよそ二間四方の舞庭を、周回・旋回が中心の道行と、採り物を持った所作で舞う。中国地方の神楽で特徴的な五行の舞や、大元信仰に根ざした舞のほか、多くの演目を有している。これらの神楽舞は、近世末以降、江の川流域や石見街道といった山陰・山陽を結ぶ街道筋によって広島県北部へも伝播し、中国地方で行われる神楽競演大会でいうところの「旧舞」「新舞」の芸態を生み出した。

神職が舞っていた神楽舞のうち、直面で神楽鈴や扇子、剣、御幣などを採り物とした儀礼的な演目を「儀式舞」、主に着面で、記紀神話や古典をもとに演劇風に構成された演目を「能舞」と、今日では呼び、多くの神楽団体がこの「儀式舞」と「能舞」を伝承している。そのなかでも代表的な演目は、一九五四年に発売された代表的なテキスト『校定「石見神楽台本」』に収録されている。

## 二 石見神楽の演目「鐘馗」と謡曲「鍾馗」

石見神楽の伝承地域では、氏神社の祭礼や大元神社の式年祭等で、ほぼ必ず演目「鐘馗」が奉納されてきた。伝承活動の当事者の小川徹は、「鐘馗」が数ある演目のなかでも重要視される舞であることに注目し、芸態の特徴や石見神楽面、石見神楽衣裳等の伝播の道筋を辿ることができていることを示した。

石見神楽伝承地域では、浜田地域から海岸部にかけて、鐘馗も疫神もともに着面の舞である。鐘馗は厳めしい面相に豊かな髭をたくわえ、頭には幞頭の二脚の紐が剣のように誇張された専用の唐冠をかぶる。謡曲「鍾馗」のような黒髪はつけない。疫神は目と口を大きく開いた男鬼の面をつける。こちらは頭にガツと呼ぶシユロ皮や、ヤク・馬

の毛でつくった黒髪をつける。

一方、山間部では、鐘馗が着面する地域としない地域とがあり、前者は浜田地域に倣ったものと推測される。後者は直面で角飾りと呼ぶ烏帽子にタクリをみずら様に巻きつけたものをかぶる。疫神は、邑南町市木地区にルーツを持つ柿渋色あるいはベンガラ色をした面で、眉や顎などに毛が植えられている。小川は、鐘馗と疫神（ただし般若面）の木彫面があることから、浜田地域では近世期から鐘馗・疫神ともに着面の舞で、邑智郡周辺では鐘馗の木彫面が見られず、疫神のみが着面の舞で、のちに浜田市長浜から鐘馗の面が伝わったものと推測する（小川 二〇二二 三〇―三二）。

芸態の特徴をまとめると、邑智郡周辺では、疫神が神楽面を使い、鐘馗は直面か、浜田市長浜地区由来の神楽面を付ける二パターンあり、直面のほうが古い形を残しているといえる。一方、浜田地域周辺では、鐘馗・疫神ともに伝統的に着面の舞である。いずれの地域でも、疫神が暴れ回るシーンは、体内を病が蝕むような怖気を感じさせる。

石見神楽の他の演目と異なるのは、出掛けの後の神舞が、茅の輪を振りかざしながら四方を探るような所作（「探り」）で、ゆつくりと重みを持った所作やジリジリと摺り足で周回する道行が長いこと、鬼が神楽幕を起点に「幕切り」という所作をすること、神と鬼が背中合わせに探りを入れる場面があること、そして一神一鬼の舞ながら、短縮することなく舞えば一時間にもおよぶことなどが挙げられる。

また、石見神楽衣裳が、細川勝三により大正末期頃に成立したことで、神楽団体の有する神楽衣裳の中でも一番高価かつ豪華で重い「鐘馗」専用の衣裳ができたことも興味深い点として挙げられる。

この演目「鐘馗」は、謡曲「鐘馗」の影響を受けて成立したものと考えられてきた。しかし、結論から言えば、謡曲の影響は限定的だと推測される。

謡曲「鐘馗」は、作者・成立年については判然としないものの、典型的な複式夢幻能の形式をとっている。唐土終南山の麓に住む旅人（ワキ）が都へ上る途中で、怪士の面をかけた物凄まじげな者（前シテ）に呼び止められ、「悪鬼を亡ぼし国土を守らん」（観世 二〇一四 二）との誓願を立てた鐘馗の亡霊であることを明かされる。旅人が法華経を誦

誦して鍾馗の亡霊を吊っていると、小癡見の面に赤頭・唐冠の姿をした鍾馗の精霊（後シテ）が顕れ、「寶劍光すさましく日月影おろそかに松嵐梢を拂ふがごとく 悪鬼の乱れ恐れ去」る（観世 二〇一四 五一六）、誓願の威力を見せる力強い曲趣の演目である。鍾馗の亡霊が、ワキに法華経を誦誦されることで悪心を翻し、王道守護・国土守護の誓願を立てて神力を顕すことから、明らかに仏教的な解釈のもとに鍾馗の伝説を再構築していることがわかる。

石見神楽の演目「鐘馗」は、成立年や作者等の詳細は不明だが、現存最古の資料で「明和八年卯歳十月廿八日 夜神楽規式神役 注連主郷原大膳」（一七七一一、江津市松川町上津井）に見える。旧・邑智郡桜江町教育委員会による調査では、天明元年（一七八一、邑智郡邑南町矢上）、文政八年（一八二五、邑智郡邑南町矢上）、天保一〇年（一八三九、江津市桜江町井沢）、安政六年（一八五九、邑智郡邑南町市木）、文久元年（一八六一、邑智郡川本町三原）、明治五年（一八七二、邑智郡美郷町布施）の大元神の式年祭における役指帳等の資料で「シヨウキ」の名を見ることができ、これに加えて、筆者が浜田市内および大元神楽伝承館（江津市桜江町市山四八二）で収集した役指帳が【表1・上段】である。

これらの資料から、当地域において演目「鐘馗」は、一八世紀の中頃には既に神楽の演目として確立していたことがわかる。また、役には二人の名前が書かれており、これを謡曲同様に鍾馗と旅人（ワキ）と見ることができ、近現代の各地の神楽台本や舞の伝承から、神（鍾馗）と鬼（疫神）の一神一鬼の舞であったと断定してよいだろう。神楽台本の検討は後述するが、神楽における主題は、神が剣によって鬼を退治することにある。謡曲では、最後の場面で鍾馗が舞台から橋掛、脇座へと激しく舞い、切りつける所作や拍子を踏みながら

シテへ禁裏雲居の樓閣の

地謡へ此處や彼處に遍満し

シテへ或は玉殿

地謡へ廊下の下御階の下までも御階の下までも 劔を潜めて忍びく／＼に索むれば 案の如く 鬼神ハ通力失せ

現れ出づれば忽ちに ずだく／＼に切り放して 目のあたりなる その勢ひたゞこの劔の威光となつて 天に輝き地に遍く をさまる國土なる事治まる國土となる事も げにありがたき誓ひかな げにありがたき誓ひかなと謡い去つて行く〔観世 二〇一四 七〕。この場面を神楽化したもの、と解釈することもできるが、断定することはできない。

特に石見神楽では、一神一鬼の舞であることから、神だけではなく鬼の役も非常に重要視されてきた。一八九〇年代後期に、石見神楽蛇胴を開発した植田晃司は、石見神楽長浜社中の舞手のなかでも「鐘馗」の疫神の名手だった。孫の倫吉は、「じいさんの舞う鬼はいかにも恐ろしげだった。」<sup>⑩</sup>「植田（晃司）の鬼は、本当バタバタうごかんこーに恐ろしいって皆言いよつてね、ヤジるのに『オオ、鐘馗負けるなよ』（と観客が言っていた）という話を聞いていました。」と語る<sup>⑪</sup>。

### 三 台本からみる演目「鐘馗」の形成と内容

演目「鐘馗」の全体的な構成は、「能舞」の演目のなかでもスタンダードな構成をしている。神歌・神舞↓神の口上（名のりと神が出てきた理由）↓神舞（「探り」の所作）の中段から鬼が登場する↓神・鬼（「探り」の舞↓神と鬼が会おう↓神は中入り・鬼舞↓神が再び出てくる↓神と鬼の間答（名のりと出てきた理由）↓立ち合い↓神が茅の輪と宝剣で鬼を退治する↓神の舞い上げ（よろこびの歌・舞）、という展開をする。

これまで、演目「鐘馗」の内容について、

かつて素戔嗚尊は唐国に渡ったときに鐘馗大神と名乗り、<sup>きよもろう</sup>虚耗という悪を退治した。その怨念や眷属が日本へ渡ってきて庶民を悩ましているのので、素戔嗚尊は疫神と対峙する。疫神は一切の病を掌っており、やってきたか

【表1】役指帳・台本一覧

【表1・上段】役指帳								
No.	和暦	西暦	日付	地域	現在の地域名	題記	演目名	配役
(1)	(享保元)	(1716年)		邑智郡田所村	邑智郡邑南町	神楽舞目録	商貴	
2	明和八年卯歳	1771年	十月廿八日	邑智郡上津井村	江津市桜江町	彼神楽殿式神役・注連主 郷原大膳 是ハ上口大屋神楽之役儀兼神書此内二有	鐘麩大臣	原田氏・佐仲
3	天明元巳年	1781年	九月首十辰	邑智郡		太元尊神夜神楽役指覧帳	鐘麩	増見・山城
4	天保十年	1839年	亥十月中九日	邑智郡		大元尊神御神楽御役指	鐘麩	大田・美佐穂
5	安政六巳未歳	1859年	九月廿日	那賀郡市木村	浜田市旭町	於馬場八幡宮大元大明神御神楽役指帳	鐘麩	次馬・但馬
6	安政六歳	1859年	長月中九日	邑智郡大貴村	江津市桜江町	大元大明神御神楽役儀	疫病退治	
7	文久元年	1861年	霜月八日	邑智郡		大元大明神御神楽役差帳	鐘麩	三浦氏・板根氏
8	慶應三丁卯年	1867年	十月廿八日頃	那賀郡内村	浜田市	厄災退除大解除神式次第	鐘旭	
9	明治三庚午	1870年	閏十月廿八日	運摩郡波積本郷	江津市波積	大元尊神御神楽御役指記・注連主波積本郷大宮司 郷原肥後守從五位藤原口幸久	鐘麩	湯淺眞音・湯淺遠江
10	明治五壬申	1872年	九月八日	邑智郡布施村	邑智郡美郷町	田立神社御神楽役記	鐘麩	城月除茂工・三上好任
11	明治廿三年	1890年	黄十月四日	邑智郡布施村比較	邑智郡美郷町	八幡宮御神楽舞役記	鐘麩	
12	大正十一年	1922年	十一月廿五日	邑智郡市山村	江津市桜江町	大元神社神楽式年祭役指帳	鐘麩	
13	昭和二十年	1945年	拾壹月〇六日	邑智郡日貴村	邑智郡邑南町	神楽人役帳 福原	正気	神田春市・岩本吉兵衛
14	昭和二十一年	1946年	十月十四日	邑智郡日貴村五区	邑智郡邑南町	大元神社式年祭	鐘旭	吉原区
15	昭和二十四年	1949年	十月十五日	邑智郡日貴村五区	邑智郡邑南町	大元式年祭	鐘旭	

16	昭和二十八年	1953年	十一月十日	邑智郡日貴村五区	邑智郡邑南町	大元式年祭	鐘旭	治里区
17	昭和二十九年	1954年	十一月六日	邑智郡日貴村	邑智郡邑南町	神楽奉納帳 山之内舞子連中	鐘旭	大岡宿雄・真保雄
18	昭和三十二年	1957年	十月十三日	邑智郡日貴村五区	邑智郡邑南町	大元式年祭御祭典	鐘旭	町区
19	昭和三十六年	1961年	十月十三日	邑智郡日貴村五区	邑智郡邑南町	大元式年祭	鐘旭	福原区

【表1・下段】神楽台本

No.	和暦	西暦	日付	地域名	現在の地域名	題記	演目名	資料・出典
1	明治十七年頃	1884年		浜田市内村	浜田市	藤井宗雄 牛尾弘篤 夏訂 神楽の声 領家伊吉蔵	しょうぎ	墨書
2	大正拾五年	1926年	拾月改装	邑智郡三原村	邑智郡川本町	神楽舞歌集 三原村 湯浅氏	鐘旭	『邑智郡大元神楽』P.199)
3	昭和二年	1927年	拾月吉日	那賀郡漁山村	浜田市	島根県石見郡那賀郡漁山村 小川市郎	鐘曳	墨書
4	昭和八年	1933年	八月起	邑智郡市山村	江津市桜江町	神代神歌 富立齋書 牛尾	鐘旭	『邑智郡大元神楽』P.178)
5	昭和二十一年頃	1946年		邑智郡矢上村	邑智郡邑南町	島根県邑智郡矢上村 神楽舞 矢上神楽團	鐘旭	ペ書き(複写)
6	昭和二十四年	1953年	二月	邑智郡乙原村	邑智郡美郷町	原田恒作 矢上原田厚口 伝による伝承 三瓶川流神楽舞口上儀 乙原舞子連中	鐘旭	墨書(複写)
7	昭和二十九年	1954年		浜田市	浜田市	『八調子神楽』	鐘旭	活版印刷(校定石見神楽台本)P.87)
8	昭和二十九年	1954年		浜田市	浜田市	『六調子神楽』	鐘旭	活版印刷(校定石見神楽台本)P.187)
9	昭和三十年	1955年		邑智郡市木村	邑智郡邑南町	荒木治郎氏述 市木神楽台本	鐘旭	活版印刷(複写)
10	昭和五十五年	1980年	一月吉日	邑智郡桜江町市山	江津市桜江町	長谷川鐵男	鐘旭	墨書(複写)
11	昭和六十二年	1987年	十二月	邑智郡宇都井村	邑智郡邑南町	旧宇都井神楽団に伝えられた大元神楽について 宇都井有起保寿会 松島悟	鐘旭	ペ書き(複写)

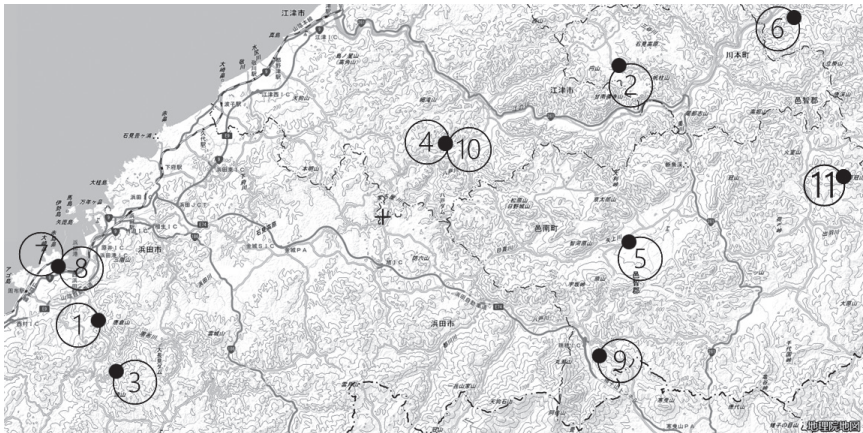
※出典:島根県大元神楽保存会 一九八二「島根県大元神楽伝島根県桜江町桜江町民俗調査委員会 一四四—一五七、瀬原忠二〇一六「島根県浜田市における江戸末期から明治期にかけての神楽事南川民俗芸能研究所」六〇 民俗芸能学会 三三、な  
らびに福原山(福宮所蔵)神楽の頁1、大元神楽伝(福原 竹内孝太郎)資料による。

らには国郡を駆けめぐり、民を悩ましこの国を魔国にするとう。合戦の末、素戔嗚尊は十束の剣と茅の輪をもつて退治する。(略)この演目は、『備後国風土記』逸文に見える茅の輪伝説と、謡曲「鍾馗」が合わさったものである。

と説明され、誰もがそのように理解してきた。<sup>12)</sup>しかし、演目の詳細な内容に関する研究は、これまでで為されてこなかった。石見地域の浜田以東に現存する台本類のうち、複写本等を含めて内容を確認できるもので「シヨウキ」が収録されているものは計一本あった【表1・下段、画像2】。石見地域西部の台本は未調査のため、今後の課題としたい。

これらの台本のうち、

- ① 一八八四年頃「藤井宗雄・牛尾弘篤 更訂 神楽の声 領家伊吉蔵」(浜田市)
- ② 一九二六年「神楽舞歌集 三原村 湯浅氏」(川本町)
- ③ 一九二七年「島根県石見国那賀郡漁山村 小川市郎」(浜田市)
- ④ 一九三三年「神代神歌言立叢書 牛尾」(江津市)
- ⑤ 一九四六年頃「島根縣邑智郡矢上村 神楽舞 矢上神楽團」(邑南町)
- ⑥ 一九五三年「原田恒作より原田厚口伝による伝承 三瓶川流神楽舞口上帳 乙原舞子連中」(美郷町)



【画像2】神楽台本所在地

⑨ 一九五五年「荒木治郎氏述 市木神楽台本」(邑南町)

は、特にそれぞれの地域で行われていた神職神楽の伝統を比較的そのまま残していると考えられる。なかでも①「神楽の声」は現在、江津市有福温泉町の別府山八幡宮に所蔵されているもの以外所在不明だが、表書きに浜田市鍋石町の国学者・藤井宗雄と浜田市内村町の神職・牛尾弘篤更訂と記されている。①はいわゆる「明治の神楽改正」<sup>13)</sup>によって整えられた台本のため、今後より丹念な検討が求められる。なお、⑨以降は、『校定石見神楽台本』(⑦・⑧)や、当時邑智郡桜江町市山の神職・牛尾三千夫の指導等の外的要因による変更も想定して検討する必要があるだろう。また、⑤(一九四六頃、邑南町)は、GHQへの提出資料として整えられたものと考えられるため、当地区での伝承そのままに書き写されたものかどうか疑義がある。

(一) 登場人物とその正体

石見神楽の伝承地域において、「鐘馗」が一神一鬼の舞であることは共通している。しかし、その名前や呼び方に注目すると、二つのタイプに分けられる。

① 「シヨウキ」対「エキシン」

神が出掛けの舞の後に、名のる場面の口上で、「シヨウキ」と名のるものは、浜田市内の台本①(一八八四年頃)・③(一九二七年)・⑦(一九五四年)の二本だった。

① 「あは しようきと云へる神なり 此□玄宗皇帝疫神の為に冒かされなやむと聞く 我其病をすくわんかた  
め かの疫神を退治せばやと思ふなり」

③ 「我ハ正鬼トイエル神 ナリ コノ頃 ゲンソウ皇帝 エキシンノタメ オカサレナヤムトキク 我レソノ病  
ヲ スクワンタメ 彼ノ エキシンヲタイジ セバヤト思ウナリ」

⑦ 「我は鐘馗といへる神なり。この頃玄宗皇帝疫神のために冒され悩むと聞く。我その病を救はんがため、かの

疫神を退治せばやと思ふなり。」

③は浜田市鍋石町の小川市郎によるもので、①をもとに③が書き写された可能性が高い。謡曲「鐘馗」や本来の鐘馗信仰に沿った筋立てになっていることがわかる。

②「スサノオノミコト」対「エキシン」

出掛けの舞後に神が名のる神名が「スサノオノミコト」となっているのは、前述の浜田市内の台本以外すべてに当てはまった。なかでも②（一九二六、川本町）が、邑智郡の江の川流域の神職神楽の名残を留めているものと考えられるので、これを中心に内容を見てみたい。

② 「抑是は日ひの神かみの弟あに健速須佐之男たけすみすけのみことの命のみことといいゑる神かみなり 吾昔わがむかしから国くにに渡り 自分鐘馗大神かねぢうおほのかみとななり きようごうといいゑる者ものを退治たいぢせしが 其そのをんねんかけんぞくか 今吾国いまわがくにに参り諸民しよたみになやみをなすよし 何なるものや是をまさしく尋ねばやと思ふなり」

傍波線部のように、昔 昔カラクニ（唐国・韓国）に渡った際に「シヨウキ」と名のついていたとあり、結果的に、この神は「スサノオノミコト（日本での神名）」＝「シヨウキ（カラクニでの神名）」だということができる。

なお、鬼の正体について、神の口上では「キヨウゴウ・キヨモウ」というものを、カラクニで退治し、その怨念か眷属かが、我が国（日本）に来て諸民を悩ましていているという。この「をんねんかけんぞくか」というのが、鬼を指しており、鬼はその口上で

② 「お、吾は是 春はるのゑきれい 夏なつぎやへい 秋あきのちはらに 冬ふゆのがい病 一切いっけつの病びょうのつかさとなる大おほきじんとは わがことなり」

と名のる。これから外れるもののうち、⑪(一九八七、邑南町)は「大悪人」とあるので、訓みの転訛の可能性も考えられる。

なお、⑤(一九四六、邑南町)では「大疫魔神虚魍」とあるが、演目ごとに付された説明書きに「梗概(内容)」「登場者」が記されており、「鐘馗」の「梗概(内容)」には「虚魍と言ふ大疫病神」、「登場者」では「大疫病神の虚魍といふ悪魔」と説明されているので、これらを合体した名前だろうと言うことが推測できる。

いづれにせよ、これらの台本からは、かつてカラクニで退治されたキョウゴウ・キョモウの怨念か眷属か、日本にやってくる諸民を悩ますモノの正体は「エキシン・ダイエキジン」だということがわかる。

この「エキシン」とは何者なのか。鬼が「お、我はこれ」という定型の口上に続いて、四季の流行病を挙げ、「一切病の司」と名のる。

① 「をを 我わ是れ 春の多きれい夏ぎくれい秋のちばらに冬がいびよう  
なり」 一切病の司さ えき神とわ我が事

② 「お、吾は是 春の多きれい 夏ぎやへい 秋のちはらに 冬のがい病 一切の病のつかさとなる大多きじん  
とは わがことなり」

注目したいのは、①の浜田市の台本でも、②の邑智郡の台本でも、春の「エキレイ・エキヘイ」(≡流行病)、秋の「チハラ」(≡赤痢)、冬の「ガイビョウ」(≡咳の病)はどの台本も共通しており、異同が見られないことである。

夏に限っては、「ギャクレイ(瘧癘)」(≡瘧おんやマラリア)が③・④・⑦・⑧・⑨の六本(そのうち⑨・⑩にはヘイの訓みがふられている)と多数を占めるものの、ほかの病名と比べて異同が多い。①「ぎくへい」、②「ぎやへい」はともに転訛の可能性も考えられるが、⑤「カクゲ(やまいだれに雀・やまいだれに虞)」、⑥「冷え」、⑪「日」は詳細が判然としない。

いづれにせよ、つまり鬼は四季の流行病とその他一切の病を司るモノであることが、これらの口上から明らかにする。

③「スサノオノミコト」対「エキシン」と「シヨウキ」対「エキシン」の混在

神の出掛けの舞と口上につき、鬼が舞い出て名のりをあげた後に、鬼が神に対して誰何する場面にあたって、邑智郡の台本のうち、江の川流域にあたる②（一九二六、川本町）・④（一九三三、江津市）・⑧（一九五四、浜田市・江津市）・⑩（一九八〇、江津市）は、鬼が「いづれの神にましますぞ」と問うのに対応して「お、吾は是 鐘馗大神とは我事なり」と述べる。

出掛けの口上では「スサノオノミコト」と名のついていたにも関わらず、鬼に対してはカラクニで名のつた神名「シヨウキ」を名のる点が特徴的だといえる。

一方、鬼の問いに対して「スサノオノミコト」と応えた⑤（一九四六頃、邑南町）・⑨（一九五五、邑南町）の台本でも、神の「吾が言葉に従って（外つ国へ）退散するか、さもなければ汝が運命どゞめんこと唯今の事」なり、という口上に対して、「如何に鐘馗大臣（大神）なればとて」と鬼が応えているものが、広島県境に近い地域で確認できる。

これまで、近世における演目「鐘馗」の神は、「スサノオノミコト」であって、浜田市内では、明治期にこれを「鐘馗」と改めたとする解釈が、誰が言うともなく一般的になされていた。しかし、当該の口上が無い⑥（一九五三、美郷町）の台本以外は、いづれも「スサノオノミコト」と「シヨウキ」とが神と鬼の口上の中に混在していることがわかる。

## （二）神の採り物と表象

謡曲「鐘馗」と同様に、石見神楽の「鐘馗」でも「十束の剣」を採り物としている。しかし実際に口上として明らかなのは、浜田市内の台本①（一八八四）・③（一九二七）・⑦（一九五四）のみに留まる。

石見神楽の「鐘馗」のシンボルとして最も目立つのは、茅の輪の採り物にもかかわらず『校定石見神楽台本』（⑦）で

しか口上に見られない。⑤・⑪は前書きの説明で「採り物」に茅の輪が入っているため、辛うじて茅の輪(⑤は竹の輪)を持っていることがわかる。

謡曲「鐘馗」では、鐘馗が国土守護・王道守護の誓願を表現することが主題化され、かつ、それは「宝剣の威光」によるものとされているが、石見神楽の「鐘馗」では、(今、ここで)神が鬼(疫病)を退治することに主眼を置いている。剣や茅の輪は重要な採り物だが、その威光によるとは断定できない。

### (三) 神楽歌

#### ① 神楽歌なし

邑智郡大元神楽保存会編『邑智郡大元神楽』に収録されている②(一九二六、川本町)・④(一九三三、江津市)および⑥(一九五三、美郷町)・⑧(一九五四、浜田市・江津市)・⑩(一九八一、江津市)の台本には、神楽歌が記載されていない。その理由として、神楽歌は別に書き控えてあり、胴取りと呼ばれる大太鼓が、舞やその時々状況に合わせて適宜組み合わせて歌うこと、口上はその役のものが口上を覚えるために書き控えているため神楽歌が記されていないにもかかわらず支障がなかったことなどが考えられる。

#### ②―① 神楽歌「八雲立つ出雲八重垣・・・」のみ

⑤(一九四六頃、美郷町)・⑨(一九五五、邑南町)の台本には、神が出てきた時の神歌として、スサノオノミコトが出る演目で歌う「八雲立つ出雲八重垣妻こめに 八重垣作る その八重垣を」を載せている。両地域とも、神の名のりが「スサノオノミコト」であることから、この神楽歌が選ばれたらうということが考えられる。

実際には、神が出る前後に、ほかの神楽歌も歌っているはずだが、そのなかでも「八雲立つ出雲八重垣・・・」がこの演目では神を表わす一つの象徴として、必ず歌うものとして意識されていたのだろう。

#### ②―② 神楽歌「八雲立つ出雲八重垣・・・」と舞い上げの歌

これは⑩(一九八七、邑南町)のみに見られる。舞い上げの歌は、神が鬼を退治した後に胴取り(大太鼓)が歌うも

ので、神を讃え、世を言祝ぐ歌である。⑪では「太鼓より よろこびの歌へあらうれし あらよろこばしこれやこの舞いたてまつる さかえまします」「其の他へあらうれし 天に黄金の花咲けば 地に白金の 実こそなりける」とあるので、胴取りの歌に続いて小太鼓・手拍子が歌うことがわかる。「あら嬉し あら喜ばし これやこの」までは定型句で、以下は地域によって、様々な歌が歌われる。

### ③ 本居宣長『玉鉾百首』由来の神楽歌

浜田市内の台本①（一八八四）・③（一九二七）・⑦（一九五四）の出掛け歌で特徴的な点は、本居宣長『玉鉾百首』<sup>④</sup>に取材した神楽歌が載せられていることだろう。

① 「千早振荒振者を拂らわんと いで立てませし神の尊き。目に見へぬ神の心の神毎に貴きものぞ 大いなるものぞ。世の中の善きも悪しきも事毎に 神の心の仕わざにぞある。よき人を世にくるしめるまつがいの 神の心わすべもすべなき。皇神の恵みを申す人草の よしとの心悪くすなゆめ。千早振神の心のまごめずは やろふのまがこと成ると逃れん。世の中を安らかせんと千早振 悪振者をやらいましける」

神楽歌で七首の歌が載せられているが、そのうちの五首が、『玉鉾百首』の i「目爾見延奴神之心之神碁登波可畏物 叙淤富爾勿思曾（メニミエヌカミノココロノカミゴトハカシコキモノゾオホニナオモヒソ）」〔村岡校訂 一九八九 四二〕、ii「世中之善母惡母許登碁爾神之心之志和邪爾叙阿留（ヨノナカノヨキモワシキモトゴトニカミノココロノシワザニゾアル）」〔同右〕、iii「吉人哀余邇苦牟疏禍津日之神乃心之須辨母須辨無佐（ヨキヒトヲヨニクルシムルマガツヒノカミノカミノココロノスベモスベナサ）」〔同 四三〕、iv「皇神乃米具久思富須人草叙世中之人阿斯久須那由米（スメカミノメグクオモホスヒトクサゾヨノナカノヒトアシクスナユメ）」〔同右 四四〕、v「知波夜夫流神之心袁那碁米受波八十之禍事那爾登能賀禮牟（チハヤブルカミノココロヲナゴメズハヤソノマガコトナニトノガレヌ）」〔同右 四五〕からとられていることは明白である。⑦では更に「へ八雲たつ出雲の神をいかに思ふ建須佐之男を人は知らずや」の歌が加えられているが、これは『玉鉾百首』の「八雲立出雲神袁奈何淤母布大國主袁人者不知夜母（ヤクモ

タツイズモノカミヲイカニオモフオホクニヌシヲヒトハシラズヤモ」(同右 四四)からとられている。特にこの神楽歌は「八十神(天国主)」「鐘馗(建須佐之男)」「大蛇(建須佐之男)」で歌われ、「八雲立つ出雲八重垣・・」の歌と同様に、大国主とスサノオノミコトを象徴する歌である。

また、最初に歌われる「千早振荒振者を拂らわんといで立てませし神の尊き」の神歌は、胴取りによる第一声としてほぼ必ず歌われる。この一句を聞けば、これから始まる演目が「鐘馗」だということが、観客にもわかる。

①で最後に歌われる「世の中を安らかせんと千早振 悪振者をやらいましける」は、③では舞い上げの歌になっている。⑦では、出掛けの歌に入れられており、舞い上げは、胴取りによる口上「あら嬉し。今まで荒れたる疫神を退治せり。この茅の輪を門口に掛け、我を念ずる輩は万づの疫のがれ得させん」に替わっている。

#### (四) 胴取り(大太鼓)との掛け合い

最後に、直接、演目「鐘馗」の内容に関わるものではないが、⑥(一九五三、美郷町)・⑪(一九八七、邑南町)にのみ見られる胴取り(大太鼓)との掛け合いの口上に注目したい。

鐘馗が出てきて神舞を舞った後に、名のりの口上を述べる。鐘馗の⑥「其の怨念か眷属か(中略)依てこれを探ねばと思ふなり」、⑪「その おんねんか けんぞくか(略)これを尋ね退治 せばやと 思ふなり」という口上に続いて胴方・太鼓、つまり大太鼓の胴取りが「御急なされ候」と、鐘馗に向かって言う。⑪では更に鐘馗が「かしこまって候」と応えて、次の舞に転換する。

このような神と胴取りとの掛け合いは、管見の限り、広島県の安芸高田市周辺へ伝播した石見神楽(現在は高田舞と呼ぶこともある)でしばしば見られる。

これらの台本が伝承された美郷町および邑南町宇都井は江の川の中・上流域に位置し、いくつかの主要街道を経て三次市や安芸高田市に接続しているため、今後他の演目比較をすることによって、神楽舞の伝播について興味深い示唆を与えてくれている。

【表2】神楽台本の内容比較

項目	場面	No.	内容	台本	摘要	
①	名 の り	神	71 ショウキと名のる	①③⑦	鐘道・正鬼	
			72 カラウニでショウキと名のつた	②④⑤⑥⑧⑨⑩⑪	唐国・韓国	
		神→鬼	73 ショウキと名のる	①②③④⑦⑧⑩		
			74 エキシジ(ダイエキシジ)と名のる	⑤⑥⑨⑪	疫神・大疫神・厄神・大疫神	
	鬼	大疫隣神虚観と名のる	74 大悪人と名のる	⑤		
			疫神と呼ぶ	⑪		
		神→鬼	イ1 虚耗・虚観と呼ぶ	①③⑦		
			イ1 キョウゴウと呼ぶ	④⑤⑧⑨⑩	強豪	
		鬼→神	イ2 ショウキダイジンと呼ぶ	②④⑤⑥⑧⑨⑩⑪	鐘道大臣・鐘道大神	
			イ2 大御神と呼ぶ	③		
②	鬼の被害者	カ1 玄宗皇帝	①③⑦			
		カ2 世の人々・諸民・諸人	②④⑤⑥⑦⑨⑩⑪			
		サ1 春：エキレイ・エキヘイ	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	疫魔		
		サ2 夏：ギケウレイ・ヘイ	③④⑤⑦⑧⑨⑩	瘧疾・瘧病		
		サ3 秋：チハラ	①②⑤⑥⑪			
③	鬼の正体	サ4 冬：ガイビョウ	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	血腹・千原 咳病・外病		
		シ 一切病の司	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪			
		ス1 眷属を引き連れる	①②③⑤⑦			
		ス2 国々、村々を駆けめぐる	①③④⑥⑦⑧⑩⑪			
		ス3 家々、籠々に押入る	②③④⑤⑥⑦⑧⑩⑪			
		④	神との問答	ス1 幼き者・老いたる者・盛んなる者を苛む	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪	
				セ2 民の命を悩ます・取り絶やす・取り尽す	①②③④⑤⑦⑧⑩⑪	
セ3 この国を隣国にする	①②③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪					
⑤	目的	タ1 剣	①③⑦	(⑩)		
		タ2 茅の輪	⑦	(⑤・⑩)		
⑥	神採り物					

(五) 小括 台本から見る地域性

本章では(一)登場人物とその正体、(二)神の採り物と表象、(三)神楽歌、(四)胴取りとの掛け合い、の四項目に分けて台本の比較を行った。演目「鐘馗」は、石見地域の東半分の地域―邑智郡と那賀郡では一八世紀中頃には成立していたことがわかっていたが、台本からはいくつかの地域によって差異があることがわかった。これをまとめると次のようになる。

- 1 ①・③・⑦の浜田市内(旧那賀郡の周布川流域)
- 2 ②・④・⑧・⑩の川本町・江津市内(旧邑智郡の江の川中・下流域)
- 3 ⑤・⑨の邑南町(旧邑智郡の浜田・広島県境)
- 4 ⑥・⑪の美郷町・邑南町(旧邑智郡の江の川中・上流域)

本稿では演目「鐘馗」のみに注目して比較検討したため、結論を急ぐことはできないが、これら四つの地域が、各地域の割元庄屋による「組」や神職の集まりに重なりと想定できる。

三 石見神楽を作り出した地域と人びと

石見神楽の礎を築いた神職神楽の成立時期や、成立地域などはいまだ不明なことが多い。また、近世以前の石見地域は、支配統治機構が複雑なうえ、当地の神職家のなかには、修験山伏だけではなく、武士の系統を引く人びとがいたこともあって、ある特定の宗教者・宗教集団や、出雲・佐太の宮川兵部少輔秀行(一六〇八年頃)や備中・高梁の西林國橋(一八〇四年頃)のような特定の創始者がいたか定かではない。また、「鐘馗」についていえば、この演目は、近隣の中国地方の神楽演目にはなく、石見神楽伝承地域(北広島地域を含む)のみに見られる演目であり、当地域に

おける神楽の成立や周辺地域との関係性について今後更に検討が必要になる。

近世・近代に当地の神楽に影響を与えた人物として、今日判明しているのは、文化七（一八一〇）年に『御神楽之巻起源鈔 全』を記したとされる現・邑智郡川本町弓ヶ峯八幡宮神主・三浦重賢と、明治一七（一八八四）年に「明治の神楽改正」を牽引した国学者・藤井宗雄と高井ヶ岡八幡宮神職・牛尾弘篤ら、浜田市西部の「原井組」神職たちが挙げられる。これらの人びとが手がけた神楽台本に関しては、今後別稿を以て検討する予定である。

幕末期の国学や神道化の厳格な姿勢は、西隣の津和野藩が近隣諸藩のなかで群を抜く。一方、浜田藩では、一八世紀から一九世紀初頭の浜田藩主・松平康福、康定が好学家で、特に康定は本居宣長と交流が深く、家臣の小篠畝、岡田頼母は本居門下として活躍した。「明治の神楽改正」に最も深く関与した鍋石村の藤井宗雄、内村の牛尾弘篤は、浜田藩の国学のしんがりであった。

演目「鐘馗」が神職によって舞われていた時代、浜田地域は、近世後期、特に天明・天保・安政年間には、毎年のように氣候不順による飢饉や疫病、凶作、出水、地震等に苦しめられた。那賀郡内村（現・浜田市内村町）で「厄災退除大解除神式」が執行された慶応三（一八六七）年の前年は、五月の第二次長州征伐から始まり、同村も戦禍に巻き込まれるなど情勢不安が著しいなかで、多雨による出水や赤痢の流行、凶作など極めて厳しい状況だった。だからこそ人びとの切実な願いのなか、村の鎮守の高井ヶ岡八幡宮において「大解除」が執行された。

石見神楽には人びとを苦しめる鬼を、神や天皇が退治する演目が多くあるが、そのなかでも一際「鐘馗」は力強く、「一切病の司」の疫神を退治する演目である。祭りの場に集った人びとにとって、病に打ち克つ神の象徴は、茅の輪と十束の剣を振りかざす鐘馗であった。

## 結

本稿では、鐘馗が主役となる石見神楽の演目「鐘馗」の事例をとりあげた。

現在、J R 山陰本線では「大蛇」や「鐘馗」など石見神楽の花形たちで彩られたラッピング車両が走る。浜田市内の消火栓には、鐘馗と疫神がデザインされ、駅前商店街銀天街にも、当然のように鐘馗の石像や写真がある。さらには、浜田警察署の特別詐欺防止ポスターにも鐘馗が使用されている。そして、道の駅や観光施設では、子ども向けの十束の剣や茅の輪が販売されている。益田市の萩・石見空港の到着ロビーにもまた、鐘馗の茅の輪と疫神の鬼棒が飾られている。

しかし一方で、一九六三（昭和三八）年に山陰民俗学会が実施した島根県下三〇地区の民俗調査では、「男の節句」に鯉職を立てる地区は、ごく一部に限られており、この時期は、田植の時期と重なるために、多くの地区は笹巻き・チマキを作る程度で済ませていた。現在でも山陰地方出身者にとり、五月人形としての鐘馗人形や、絵職は馴染みがないとい<sup>15</sup>うため、節句にともなう鐘馗の信仰は希薄だと言わざるを得ない。また、非常に緻密な造形技術をもった長浜人形でさえも、鐘馗の人形やその型を確認することはできていない。あくまでも石見神楽の演目「鐘馗」だけが独立して当地域では根付いているのである。

これまで、石見神楽の演目「鐘馗」について、浜田市内の神職による「明治の神楽改正」で、謡曲「鐘馗」に倣って大幅に改変されたと考えられてきた。しかし、役指帳では、演目名が「鐘馗」と表記されるものが多数を占めており、台本も概ね普遍性が見られる。これが『備後国風土記』逸文や祇園信仰に端を発するのであれば、他地域の神楽のように「天王」<sup>16</sup>「茅の輪」<sup>17</sup>等の名称の例もあつたはずである。

限られた資料のなかで、演目の成立までは推測し得ないが、今後、石見地域内外の類似演目を比較することで、当地における民間信仰や神楽の成立について検討する一つの手掛かりになるといえよう。

## 注

- (1) 劉穎 二〇〇六「鐘馗」信仰の変遷―日中比較の視点から―『説話・伝承学』一四 説話・伝承学会 一七八―一九七
- (2) 中国の鐘馗に関する文献は、麻国鈞・有澤晶子 一九九七『日本の钟馗信仰、钟馗艺术与钟馗戏―中日祭祀演剧散论之一』『古典戏曲』

- 比較研究」戏剧、劉錫誠 二〇〇七『鐘馗論』『民間文学・理論與方法』北京・中国文联出版社など。國學院大學大学院博士課程後期課程在学の李真氏に助言を頂いた。
- (3) 二〇二三年度伝承文学研究会大会シンポジウム「キャラクター化する神仏」(二〇二三・九・一〇、國學院大學)
- (4) 石見地域では鐘馗の鐘が鐘で表記されていることが多いため、演目名は「鐘馗」と表記する。
- (5) 山路興造 二〇一四『石見神楽の誕生』『民俗芸能研究』五六 民俗芸能学会
- (6) 二〇二二『伝承文化研究』一九 國學院大學伝承文化学会 九三―九六、二〇二四『儀礼文化学会紀要』一二 儀礼文化学会 二八一―三二一
- (7) 小川徹 二〇二二「舞手から見る石見神楽の変遷と伝播と継承―演目「鐘馗」を事例に舞の変遷とものづくりを語る―」『山陰民俗研究』二七 山陰民俗学会
- (8) 廿四世観世左近訂正著作 二〇二四『鐘馗』檜書店
- (9) 邑智郡桜江町大元神楽保存会 一九九二『大元神楽』邑智郡桜江町教育委員会 二〇一一―二〇二一・一〇・一二聞き取り
- (10) 二〇二二・一〇・六聞き取り
- (11) 二〇二二・一〇・六聞き取り
- (12) 藤原宏夫文責 二〇一三 島根県立古代出雲歴史博物館『島根県立古代出雲歴史博物館企画展「石見神楽―舞を伝える、舞と生きる―」』ハーベスト出版 三三三。篠原実 一九五四『校定石見神楽台本』のほか、石見神楽の演目を紹介するウェブサイトや広報誌においても同様である。
- (13) 二〇二四・五・一四口頭発表。二〇二二年度 民俗学関係修士論文発表会・第九二五回 日本民俗学会談話会「石見神楽論―地域文化の「宝」としての検討―」
- (14) 村岡典嗣校訂 一九八九第七刷『直毘靈・玉鉾百首』岩波書店、一九三六初版
- (15) 文化九(一八二二)年静岡兵庫吉就写(校定 一九五四 二一三三)。これまでの研究では、この三浦重賢が石見神楽の成立に大きな影響を与えてきたと解釈されていたが、三浦は邑智郡の石見銀山料の神職になるため、石見全域の神楽への影響については慎重に検討すべきである。
- (16) 「二六 年中行事」一九六三『島根県下三〇地区の民俗』山陰民俗学会 一三六―一五四
- (17) 米子出身者、浜田出身者など複数人への聞き取り調査による。
- (18) 「蘇民祭」岩手県立博物館 一九九三第三版『岩手民間信仰事典』(一九九三初版)岩手県文化振興財団 一五二
- (19) 「演目紹介(茅の輪)」二〇二三『島根県立古代出雲歴史博物館企画展 出雲神楽』島根県立古代出雲歴史博物館 七四―七五

資料

① 「しよき」一八八四年「藤井宗雄 牛尾弘篤更訂 神楽の声 領家伊吉蔵」(江津市別府山八幡宮・門屋臣蔵)

歌へ千早振振者を拂らわんと いで立てませし神の尊き。目に見へぬ神の心の神毎に貴きものぞ 大いなるものぞ。世の中の善きも悪しきも事毎に 神の心の仕わざにぞある。よき人を世にくるしめるまつがいの 神の心わすべもすべなき。皇神の恵みを申す人草の よしとの心悪くすなゆめ。千早振神の心のまごめずは やろふのまがこ  
と成ると逃れん。世の中を安らかせんと千早振 悪振者アラブルをやらいましける

神 「あは しよきと云へる神なり 此□玄宗皇帝疫神の為に冒かされなやむと聞く我其病をすくわんかためかの疫神を退治せばやと思ふなり」

鬼 「それにたち向ふたる神わ如何なる神にましますぞ」

神 「あは しよきと云へる神なり 汝如何なる者やらん」

鬼 「をを 我わ是れ春のゑきれい夏ぎくれい秋のちばらに冬がいびよう 一切病の司さ えき神とわ我が事なり」

神 「汝丸の教に随てとつ国へ退くか退かざらんに於てわ この十つかのけんを以て汝が一命うち取る事只今なり」

鬼 「いかにしよき大神のしごとりとも あまたのけんぞくをひきつれ 国々村々をかけまわり をさなき者わつ

まみひしぎ おひたる者わふみころし 又さかんなる者と見た時わ五臓六腑にわけ入て きものたばねを食ひちぎ

り 民をなやまし一度びこの国をま国となさいで置くものか」

② 「鐘馗」一九二六年「大正拾五年拾月改装 神楽舞歌集 三原村 湯浅氏」(邑智郡大元神楽)一九一九

神 「抑是は日の神の弟健速須佐之男の命といゑる神なり 吾昔から国に渡り 自分鐘馗大神となりの きようごう  
といゑる者を退治せしが 其をんねんかけんぞくか 今吾国に参り諸民になやみをなすよし 何なるものや是をま  
さしく尋ねばやと思ふなり」

鬼 「あれにまします御神は いずれの神にましますぞ」

神 「お、吾は是 鐘馗大神とは我事なり 汝は何なるものやらん」

鬼 「お、吾は是 春のゑきれい 夏ぎやへい 秋のちはらに 冬のがい病 一切の病のつかさとなる大ゑきじんとは わがことなり」

神 「汝しまろがおしへに伏随て 速く外国にしりぞくか しりぞかざらんに於は 汝が運命打と、めんこと只今の事なり」

鬼 「いかに鐘馗大神の守護なればとて お、くのけんぞくをしきしたがへ釜戸くくに別入て おさなきものはひねりころし 又さかんなるものと見る時は 五ぞう六ふに別入て きものたばねを喰ちきり 民のいのちを取たやし 一度魔国になさいでおくべきや」

③ 「鐘鬼」一九二七年「島根県石見国那賀郡漁山村 小川市郎」(浜田市高井ヶ岡八幡宮・牛尾充蔵)

へ千波ヤフル アラブル神ヲ ハラワント 出立マセル神ゾ尊トキ

へ目ニ見エヌ神ノ心の神事ハ カシコキモノゾオ、ニナオモイソ

へヨキ人ヲ世ニクルシムルマカツヒノ 神ノ心ノ スベモスベナク

へ千早フル神ノ心ヲ ナゴメズハ 八十ノ マガゴトナニカノガレン

へスメ神ノ目ゲクオモホス人草ヲ 世人ノ心アシクススナユメ

神 「我ハ正鬼トイエル神ナリ コノ頃 ゲンソウ皇帝エキシシノタメ オカサレナヤムトキク 我レソノ病ヲ スクワンタメ 彼ノエキシンヲタイジ セバヤト 思ウナリ」

鬼 「其レニ立向フタルハ如何ナル神ニテマシマスゾ」

神 「我ハ シヤウキトイエル神ナリ 汝 如何ル物ヤラン」

鬼 「オ、ワレハコレ 春ノエキレイ 夏ギヤクレイ 秋ノ チハラニ 冬ガイビヤウ 一切 ヤマイノツカサ エキシントハ我ガコト ナリ」

神 「汝マロガオシエニシタガツテ外国へ シリゾクカ シリゾカザランニオイテハ 此ノケンヲ以テ 汝ガ一命打  
チトルコト只今ナリ」

鬼 「如二 大御神ノ守護タリトモ 我ガケンゾクヒキツレテ 国々村々ヲカケマワリ カマドノニ オシ入りテ  
老タル物ハ ヒネリコロシ 又サカンナルモノト見タナレバ ゴゾウ 六ブニワケイッテ カンノタバネヲ ク  
イチギリ 民ヲ ナヤマシ 一度マ国トナサイデオクベキカ タチカケタチカケ」  
後の段へヨノ中ヲ アカラセント千早フル アラブルモノヲ ヤライマシケン

④ 「鐘馗」一九三三年「御神楽舞言立目録」解題校注牛尾三千夫（『邑智郡大元神楽』一七八）

神 「抑是、日の神ノ弟素戔嗚といへる神也 去レバ 我其昔韓国に渡りし時 白鐘馗大神と名乗り虚耗といふものを退治  
せしが 其怨念か眷属か諸人に悩ミをなすと聞 是を尋はやと思ふなり」

鬼 「あれに立向ふたるハ いかなる神にてや候」

神 「ヲ、我ハ是 鐘馗太神といふもの也。汝ハいか成者やらん」

鬼 「ヲ、我ハ是 春の疫癘夏の瘧病秋の血腹冬の疫病一切病の司と成て民の命を取喰ふ大疫神とは我が事なり」

神 「汝我が教に随て外津国へ退くか 左もなくバ汝が運命とゞめん事 只今の事也」

鬼 「いかに鐘馗太神の守護成とも 我此国ニ入来れバ国々村々かけ廻り家々竈々に押入て 稚き者をばひねり殺し  
老たる者は掴ひしぎ さかん成者と見るなら 五臓六腑へわけ入肝のたばねを喰ちぎり 民の命を取尽し大日本の  
神国を魔国になさで置くべきか」

⑤ 「神楽舞之部 鐘馗」一九四六年頃「島根縣邑智郡矢上村 神楽舞 矢上神楽団 筋書」（邑智郡邑南町、大元神楽  
伝承館蔵）

へ八雲立つ出雲八重垣妻ごめに 八重垣作る その八重垣を

素戔嗚命 「抑々是れは武速素戔嗚命といふ者なり、されば其の昔異国に渡りし時 自ら鐘馗大臣と名のり人々を苦しめし虚魍キョウヂといへる悪魔を退治せしが、其の怨念か眷属か、近頃我が国に來り諸人を悩ますと聞く、如何なるものかこれを尋ねて退治せばやと思ふなり」

虚魍 「吾れに立ち向ふは如何なる者ぞ」

素戔嗚命 「抑々これは武速素戔嗚命といへる者なり 汝は如何なる魔王ぞや」

虚魍 「お、吾れはこれ 春の疫癘 夏のカケグ□□、秋の血腹に冬の咳病ガイ、一切の病の司となつて人の命を取り喰ふ大疫

魔神虚魍とは我が事なり

素戔嗚命 「汝言ふこと愚かなり 吾が言葉に従つて退散するか、さもなくば汝が運命どゞめんこと唯今の事ぞよ」

虚魍 「あら〜面白し〜、如何に鐘馗大臣なればとて、吾れは多くの眷属を引き連れて、家々の竈々に押入つて、幼き者と見る時は捻り殺し、老いたる者と見る時は掴み殺し又サカ壯んなる者と見る時は五臟六腑に分け入つて肝のたばねを喰ひ千切り 民の命を取り絶えさで置くべきか」

素戔嗚命 「面白し〜、さればこれより勝負を決せん」

⑥ 「鐘馗」一九五三年「原田恒作より原田厚口伝による伝承 三瓶川流神楽舞口上帳 乙原舞子連中」(邑智郡美郷町、大元神楽伝承館蔵)

須佐之男命 「そも〜これは日の神の弟須佐之男命と言へる神なり 吾れその昔唐国に渡り自ら 鐘馗大神と名宣り その強豪といへる者を退治せしが其の怨念か眷属か今は我が国に入り來たり世人に悩みを為すと聞く 依てこれを探ねばと思ふなり」

洞方 「御急ぎなされ候」

大疫神 「お、吾れに立ち向ふは如何なる神にてますますや」

須佐之男命 「日の神の弟須佐之男命と言へる神なり 汝 如何なるものならんや」

大疫神 「お、吾れはこれ春の厄れい夏は冷え 秋のちはらに冬のがい病一切病の司となつて民の命を取り喰ふ大疫神とは吾が事なり」

須佐之男命「汝吾が訓へに従いて早く外国に退りぞくや さもなくば汝の運命止めん事只今の事なり」

大疫神 「あ、おかしやなく、吾れこの国に 入り来たり国々家々竈々に押入りて 小さきものはひねり殺し大なる者は掴みひしぎ 又に盛んなる者と見へるときは五臓六腑に分け入り肝のかばねを喰ひひしぎ大日本神国を一度魔国に為さいでおくべきか」

⑦ 「鐘馗」一九五四年「八調子神楽台本」篠原実編『校訂石見神楽台本』神楽振興会（浜田市）

へ千早ふる荒ぶるものを拂はんと出で立ちませる神ぞ貴き

へ目に見えぬ神の心の神事はかしこきものぞ凡にな思ひそ

へ世の中の善きも悪しきもことごとくに神の心のしわざにぞある

へよき人を世に苦しむる禍つ日の神の心のすべもすべなさ

へ皇神の愛ぐく思ほす人草ぞ世の中の人悪くすなゆめ

へ千早ぶる神の心を和めずは八十の禍事なにとのがれん

へ世の中を安からしめんと千早ふる荒ぶるものをやらひましける

へ八雲たつ出雲の神をいかに思ふ建須佐之男を人は知らずや

神 「我は鍾馗といへる神なり。この頃玄宗皇帝疫神のために冒され悩むと聞く。我その病を救はんがため、かの疫神を退治せばやと思ふなり」

鬼 「それに立ち向ふたる神はいかなる神にてましますぞ」

神 「我は鍾馗といへる神なり。汝いかなる者やらん」

鬼 「お、我はこれ、春の疫癘夏瘧癘、秋の血腹に冬咳病、一切病の司、疫神とは我が事なり」

神 「汝、麻呂が教に従つて外つ国へ退くか、さもなれば、この茅の輪に十束の宝剣を以て汝が一命打ち取ることに只今なり」

鬼 「いかに鍾馗大神の守護たりとも、数多の眷属を引き連れて、村々国々を駆けまはり、竈々に押し入つて、幼きものは掴みひしぎ、老いたるものは踏み殺し、又元氣盛なるものと見るならば、五臓六腑に分け入つて、肝のたばねを食ひちぎり、民を悩まし、この国を魔国となさいでおくものか

喜舞 「あら嬉し。今まで荒れたる疫神を退治せり。この茅の輪を門口に掛け、我を念ずる輩は万づの疫のがれ得させん」

⑧ 「鐘馗」一九五四年「六調子神楽台本」篠原実編『校訂石見神楽台本』神楽振興会（邑智郡）

神 「抑自は日の神ノ弟素戔嗚といへる神也去れば我其昔韓国へ渡りし時自ら鍾馗大神と名乗り虚耗といふものを退治せしが其怨念の眷属が我国へ渡り諸民に悩みをなすと聞 是を尋ねばやと思ふなり」

鬼 「あれに立向ふたるはいかなる神にて候や」

神 「オ、我は是鍾馗大神といふもの也汝はいか成者やらん」

鬼 「オ、我は是春の疫癘夏の瘧癘秋の血腹に冬の咳病一切病の司と成て民の命を取喰ふ大疫神とは我が事なり」

神 「汝我が教に随て外つ国へ退くかさもなくば我が運命とゞめん事只今の事也」

鬼 「いかに鍾馗大神の守護成とも我此国に入成れば国々村々かけ廻り家々竈々に押入つて稚き者をばひねり殺し老いたる者は掴みひしぎさかん成者と見るならば五臓六腑へわけ入つて肝のたばねを喰ちぎり民の命を取り盡し大日本の神国を魔国になさいで置くべきか」

⑨ 「鐘馗」一九五五年「荒木治郎氏述 市木神楽台本荒木治郎、尼川尚明写」（邑智郡邑南町、大元神楽伝承館蔵）  
へ八雲たつ 出雲八重垣妻ごめに 八雲つくるその八重垣を

神 「抑々これは 日の神の弟武早素盞鳴命と言へる神なり 我 昔唐国に渡り虚耗チゴウと云うものを退治しその怨念か眷属か 今我が国に渡り 諸民に悩みを成すと聞く これは如何なる者か 尋ねばやと思ふなり」

鬼 「あれにみえしは何者ぞや」

神 「我は是れ 日の神の弟武早素盞鳴命と云へる神なり 汝は如何なる者ぞや」

鬼 「お我は是れ 春の疫癘 夏の□癘、ハ秋血の腹に 冬の害病 一切病の司となつて 大疫神とは我が事なり

神 「あら 愚か々 汝麿が教に従つて早く外つ国へ退くか さもなくば汝の一命止めんこと只今の事なり」

鬼 「如何に鍾馗大神の私語なればとて 大きな者は踏み殺し 小さい者はひねりつぶし 又盛んなる者とみる時は 五臓六腑を喰ひ破り 今此の日本は神国なれど 一度は魔国にせいでおくものか」

⑩ 「鐘馗」一九八〇年「神楽台本／桜江町市山／長谷川鐵男」(江津市桜江町、大元神楽伝承館蔵)

神 「抑々自らは 日の神の弟素戔鳴尊といえる神也 去れば我その昔 唐国え渡りし時 自ら鍾馗大神と名乗り

虚耗といふものを退治せしが その怨念の眷属か我が国へ渡り諸民に悩みをなすと聞く 是れを尋ねばやと思ふなり」

鬼 「あれに立向ひたるはいかなる神にて候や」

神 「お、我は是 鍾馗大神といへる者なり汝は いかなる者やらん」

鬼 「お、我はこれ春の疫癘夏の瘡病秋の血腹に冬の疾病 一切病の司と成つて 民の命を取喰ふ大疫神とは我が事なり」

神 「汝愚か々 我が教えに随つて 早く外国へ退くか □もなくば汝が運命とゞめん事只今の事なり」

鬼 「いかに鍾馗大神の守護なりとも我この国に入り来れば国々村々 かけめぐり家々竈々に押入つて稚き者をばひねり殺し老ひたる者は 掴ひしぎ盛んなる者と見るならば五臓六腑へわけ入りて肝のたばねを喰ひちぎり民の命を取り尽し 大日本の神国を魔国になさいで おくものか

① 「鐘馗」一九八七年「旧宇都井神楽団に伝えられた大元神楽に付いて 宇都井有起保存会 松島悟」(邑智郡邑南町、大元神楽伝承館蔵)

へ八雲立 出雲八重垣つまこめて 八重垣つくる そのの八重垣

神 「そもそも これは 日の神の弟須佐之男命と云える神なり 我れ其の昔 唐国に渡りし時 自から鐘馗大神と名のり 鐘と云ふ 魔王を一人退治し その おんねんか けんぞくか 今我が国にとびきたり 日に日に諸人をなやますよし いかなる者や これを尋ね退治せばやと 思ふなり」

太鼓 「御急なされ候」

神 「かしこまつて候」

鬼 「おうー我れはこれ 我れにまします御神はいずれの神にてましますかー」

神 「そもそも これは 日の神の弟 須佐之男命と云える神なり 汝ち 如何なる者や」

鬼 「春の葉れい夏が日に 秋の千原に冬の外病 一切病のつかさとなつて 万民を取食ろう 大悪人とは 我が事なり」

神 「汝ち おろかや 汝ち我が仰、せに従い 唐国に退くか さもなくば 汝ちの運命 とどめん事 只今の事なり」

鬼 「あ、か おかし あかおかし いかに鐘馗大神と云えども 我れ 此の地に いるなれば 日本国々かけ廻り

かまど かまどに押入つて 幼き者をば ひねり つぶし 老いたるものは二本の指で ひねりつぶし 又元氣

さかんな者を見た時は ごぞうろつぶに訳け入つて 腹のたばねを 食いちぎり 民の命を取りつくし 大日本の

神国を今一度魔国に なさいで おくべきかー」

太鼓より よろこびの歌

へあらうれし あらよろこばしこれやこの舞いたてまつる さかえますます

其の他

へあらうれし

天に黄金の花咲けば

地に白金の

実こそなりける

## 石見神乐曲目《钟馗》的形成及内容

关键词：钟馗 民俗艺能 石见神乐 岛根县

### 摘要

钟馗是中国唐代传说中的人物，在中日两国民间被信奉为防疫辟邪之神。通过中世纪以来的绘画、护身符、手工艺品等事例可以看出钟馗在日本被广泛接纳。本论文以岛根县西部民俗艺能—石见神乐曲目中的《钟馗》为例，基于石见浜田以东地区发现的近世《役指帐》及近代以后的剧本，对此曲目的形成及内容进行了考察。迄今为止，《钟馗》曲目一般被认为是《备后国风土记》逸文中的苏民将来传说和谣曲《钟馗》结合而成的作品。通过近世《役指帐》的记载可以得知：《钟馗》在18世纪中叶已经成为该地区的神乐曲目。通过比较近代以后剧本中的（一）出场人物及其真实身份、（二）神所持物品及表象、（三）神乐歌曲、（四）太鼓手的相互关系，可以发现：四个地区的传承内容明显略有不同。该曲目以祛除疫病之鬼为主题，与谣曲关联有限。今后，通过比较石见地区内外的类似曲目，将为研究当地民间信仰及神乐的形成提供线索。